

フレデリック・ヴェジェ

制作紹介（近年抜粋）





進撃のコロボックル

2022

146点 ペインティング 方眼紙 100x70cm

中世風の社会を舞台に民族間の紛争が繰り返される漫画『進撃の巨人』では、ウルトラナショナリズムに近い機能をもった国家が描かれています。そこでは、外部の脅威、人間に似た姿の怪物たちとの対比によって人類が定義されています。このパラダイムのなかで人類を救おうとする主人公は、その8割を排除するに至るのです。

1887年から1913年にかけて東京人類学会では、「穴に住む人」を意味するとされたコロボックルという名の先史時代の人々について、その仮説をめぐる科学論争がおこります。この原始民族との差別化によって日本人のアイデンティティを定義することを可能にしたのは、他者をめぐる言説により自己を規定する他者参照的な人類学言説でした。エドワード・S・モースが1877年に発見した大森貝塚により、陶器をつくり食人風習を持つ民族が存在した可能性を示唆していました。この民族を指すものとしてコロボックル（コロボックル）という名前がはじめて学説としてあらわれたのは、1882年のジョン・ミルンの論文においてでした。伝説上のコロボックルの人々をめぐる論争は、1913年の坪井正五郎の死とともに終焉を迎えました。（cf. Arnaud Nanta, *Débats sur les origines du peuplement de l'archipel japonais dans l'anthropologie et l'archéologie* (1870-1990), thèse de doctorat Paris 7, 2004)

146点のペインティングからなる《進撃のコロボックル》シリーズでは、B1サイズの方眼紙に『進撃の巨人』から引用したセリフと穴に入った巨人を描いています。一般的には芸術の生氣論と科学の貧弱な機械論は対置されますが、それはだまし絵のようなものかもしれません。ペインティングから離れて見ると、方眼紙は形而上学的背景のようにみえます。しかし近づいて見れば、描かれた身体が帯びていた揺らぎは魂のない色のかたまりに過ぎません。それにもかかわらず、これらのペインティングを目にするロマンチックな夢想家は、その生氣のない物質性もやはりなんらかの原始的な汎神論をあらわしているのだと自分で自分を説得する可能性があります。ペインティングとは、架空の民族のようにイデオロギーの鏡に他ならないのかもしれません。











1936年、40mを超える高さをもつ白衣大観音像が高崎（慈眼院）に建立された。1960年代に入って、観音はゴジラと対決することになる。映画『キングコング対ゴジラ』の撮影において、近代にそびえる2大巨頭のごとく両者は向かいあった。

主役であるゴジラとキングコングの勝敗について、日本版ではアメリカ版とは違う結末、つまりゴジラが勝ったのだという噂が、アメリカでまことしやかに流れたという。そして観音はといえば、最終的な編集で登場シーンがカットされてしまい、大西洋の向こう側とこちら側、日米版のどちらにもついに現れなかった。まぼろしのシーンを今に伝えるのは、残されたスチール写真のみである。

観音とゴジラの世紀のすれ違いが、このペインティング・シリーズの出発点となった。

Kannon vs Godzilla

2017

全74作品 / 油彩、アクリル / 紙









高崎にある少林山達磨寺の伝承によれば、江戸中期、飢饉に苦しむ農民の副業になるようにと、9代和尚がだるま作りを伝授したという。そのモデルである菩提達磨は中国に禅宗を伝えたとされ、数ある達磨伝説のなかには、海を渡ってきて日本で聖徳太子に会ったというものまである。そして高崎では、今日でも何十万個という招福だるまが手書きされ販売されている。

『言葉についての対話』のなかで、マルティン・ハイデッガーは、対話者である日本人に次のように言わせている。「私たちにとって、空虚というのは、『存在』という語で言わんとしていらっしゃるものに対する最高の名称ですから……。」（高田珠樹訳）

哲学的思索は、何よりもギリシャ語で、百歩譲ってもドイツ語でおこなう行為であるとした哲学者にしては、オリエンタリズムさえ感じさせる奇異な関心を持ったものである。鏡に映したように逆さまに仮構された根源的な他性に自分は到達しているのだと、心から感じていたようにみうけられる。

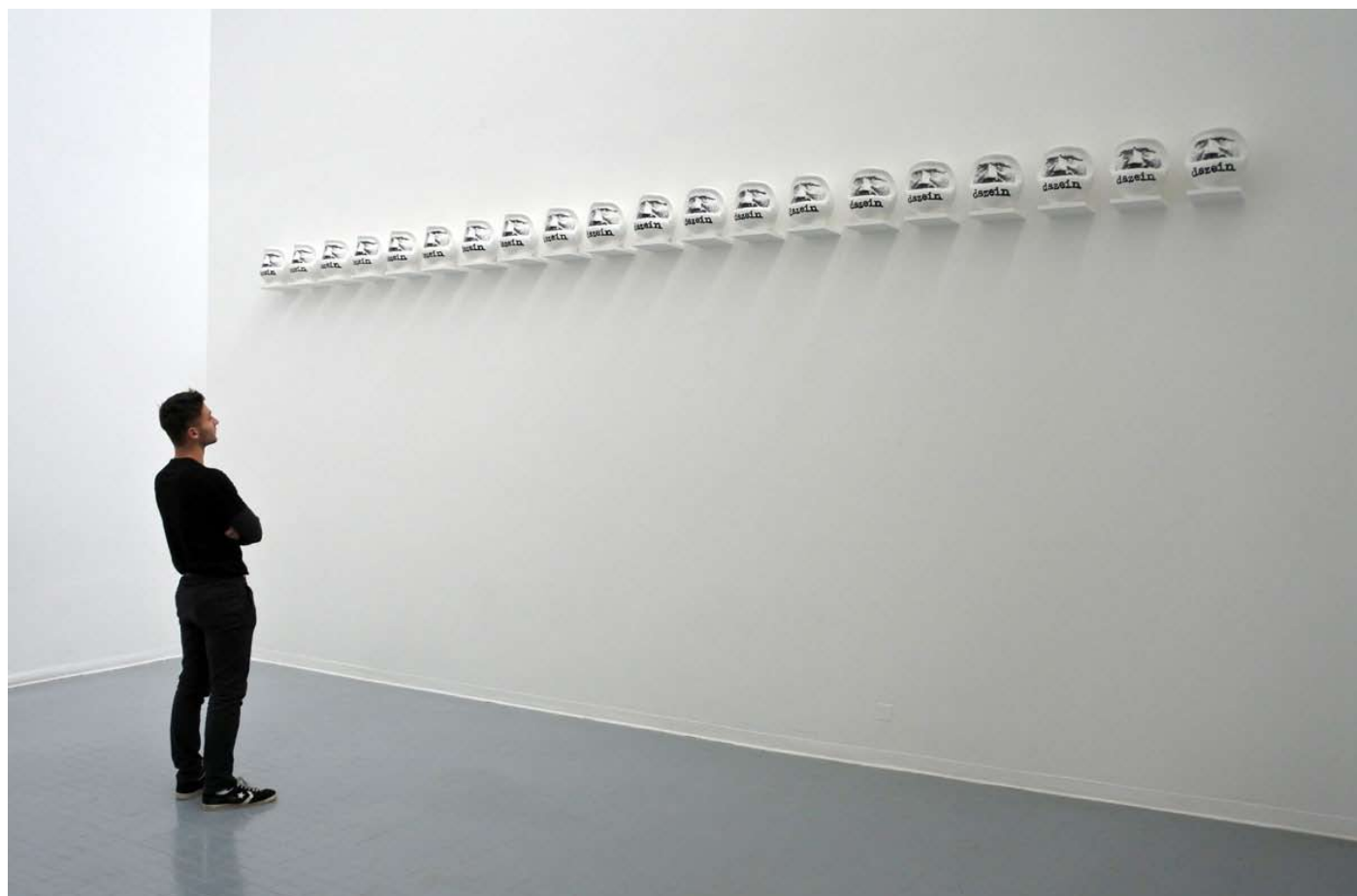
かくしてドイツ人ハイデッガーは、ギリシャ由来の存在論と日本仏教における空虚という概念とのあいだに等価性を執拗に認めようとした。それは言ってみれば、Dasein（現存在）とZen（禅）のハイブリッドのようなものである。

ハイデッガーの口ヒゲをたくわえたDaZeinだるまの風貌は、どこかアジアの賢人を彷彿させる。

Dazein Daruma

2018

全20作品 / 油性マーカー / だるま





モダニズム建築家であるブルーノ・タウトは、1934年から1936年まで高崎の少林山達磨寺境内にある草庵に暮らした。よく知られる『日本の家屋と生活』はこの庵で執筆された。

タウトは岡倉天心の演出をたいへん好んだ。天心は、彼が称するところの禅の個人主義と徳川幕府の形式主義とを、弁証法的に対立させてみせたのだ。

この対立は日本建築にもとりいれられ、キッチュな建築と対比された、簡素で禅的な伝統建築の表象がつくりだされた。ついていないことに、キッチュな建築の代表とされてしまったのは、日光東照宮だった。

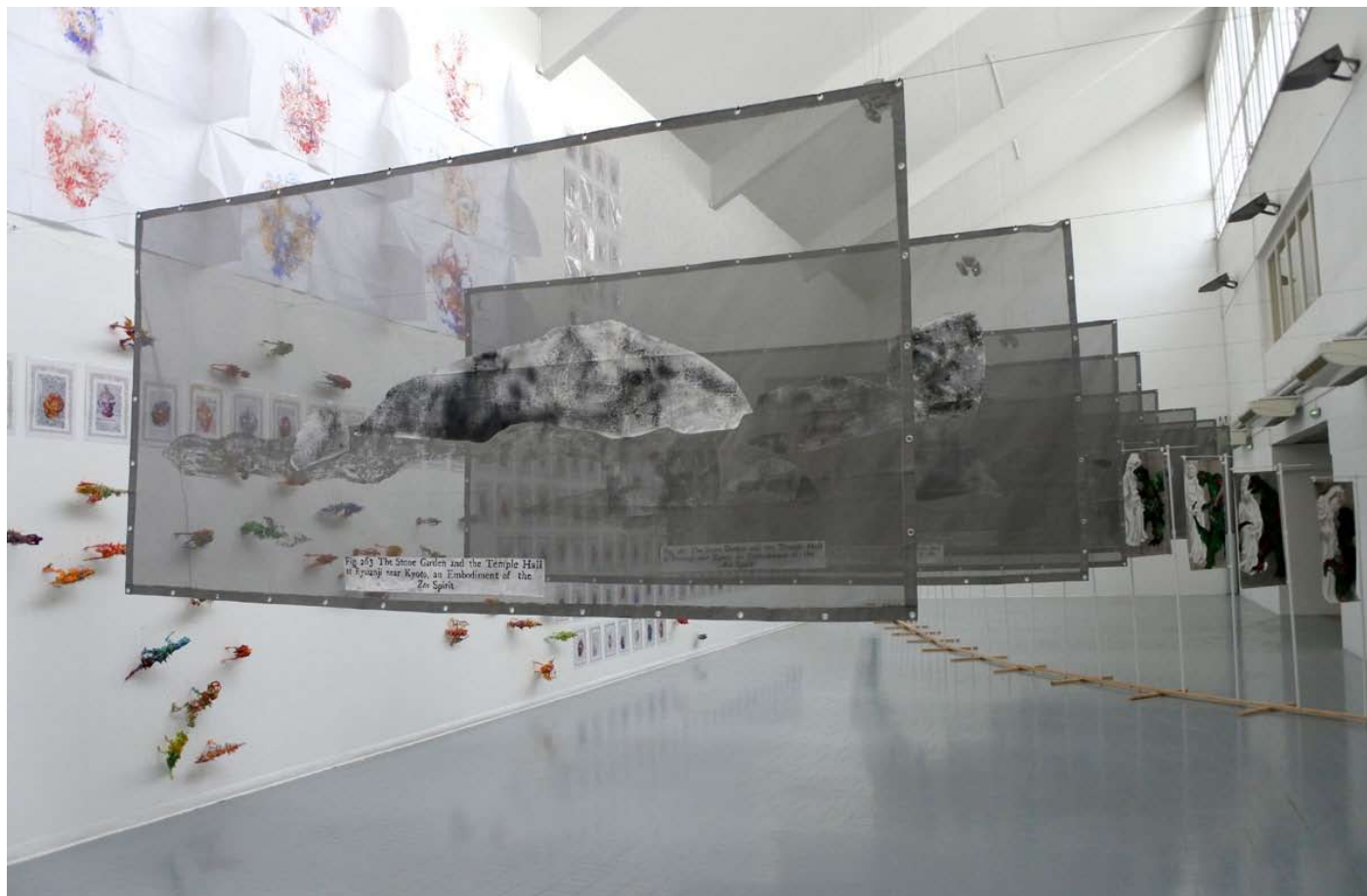
このペインティング・シリーズでは、前出著作中のキャプションを引用している。図版290のキャプションでは、近代に続く日光東照宮批判をみることができる。図版263のキャプションでは、創出者知らずの近代の発明が伝えられる。石の形をとって神秘の具現化がおこるという、誰も反論するこ

とができないファンタズムは、やがて世界中に知られるところとなった。

絵はがきじみた紋切型表象、タウトのある種のトートロジー。このシリーズは、その表と裏を描いた10点のペインティングにより構成されている。

タウト・トートロジー No. 263 & No. 290 2018

全10作品 / アクリル / 塗装シート / 1.80x3.60m









『国華』は1889年に創刊された日本初の日本美術・東洋美術専門誌である。岡倉天心が書いたとされる創刊号発刊の辞は国粹主義プロパガンダ的性格をおびている。

「夫れ美術は国の精華なり…国華は国民をして自国の美術を守護するの必要を唱道して止まざらんとす」

創刊の数年前に「日本画」という言葉が出現していた。この言葉は、アーネスト・フェノロサが講演で使ったJapanese paintingを翻訳するために初めて使われたものだった。フェノロサは西欧美学の基準をあてはめ、洋画と対比することによって、日本画の概念をつくりあげた。洋画が油彩であるのに対して、日本画は水彩であるというように。

日本固有のナショナル・アートをうちたてようとしたこのような19世紀の試みは、今でもその名残を感じさせることがある。ある日、私は、高齢者向けの花のスケッチ練習帳を手に入れた。ページの片側に色刷りされた水彩画をお手本として、もう片側に点線で印刷された同じ絵の輪郭をなぞり色を塗ることで、花の絵を描く練習ができるしくみだ。私は、近代に創出された日本画の系譜が抑圧さ

れてこの練習帳の形をとって現れたものであると勝手に仮定して、練習帳で推奨されている塗り方や点線をまったく無視し、水彩ではなく油絵具で描くことにした。それは、日本画を模倣しつつ対立する行儀の悪い洋画であり、比較によって絵画的アイデンティティをうちたてようとする、私の荒唐無稽な試みである。

ナショナル・フラワー 2018

全277作品 / 油彩 / 紙 / A5



